

## 第5章 憑依の語りと社会的コンテクスト

## 1. はじめに

憑依現象の研究は、文化人類学を含む人文・社会科学のみならず、精神医学・心理学にまたがる幅広い分野でおこなわれている。当然、この研究領域で使用される術語や概念として、神経生理学で使用される「トランス」や「変性意識(altered states of consciousness)」などが流通している。これらの概念により、憑依現象の研究は70年代から飛躍的に発展を遂げ、人類学の焦点は、人類に普遍的な神経生理学的現象が多く民族の中でいかに解釈され、当該社会の中でいかに制度化されているかを探求することになった。とくに変性意識をもとにした比較研究が明らかにしたのは、憑依の語りがそれぞれの社会で、トランスだけではなくさまざまな事象を解釈するイデオムとして用いられている事実であった[Crapanzano 1977]。

変性意識論は憑依現象に対する偏見を幾分是正することができたかにみえるが、実際には近年においても「憑依症候群」と呼ばれるように、現代医療による憑依への「狂気」のレッテルづけがおこなわれている[池田 1992: 161]。つまり、憑依を「変性意識」と呼ぶにしても、通常の意識を「正常」、変性意識を「異常」と区分する点においては、憑依が病理学的な前提におかれている[Atkinson 1992: 309-310]ことは否めないだろう。これは結局のところ、憑依の社会的・文化的なコンテクストを無視し、西洋的思考でいう「病理」へと還元することになる。だが、実際世界を見渡してみると、各々の社会で、正常と異常、健康と病を区別する固有の指標が存在する。そこでは、どのような神霊が憑依し、また実行されるセアンスがどのように社会的・宗教的役割をもつのかという共通の認識がみられる。ゆえに最近の人類学的研究の潮流は、当該社会における文化的・歴史的なコンテクストに重点が置かれるようになった[Boddy 1994: 409]。

一方で、憑依を周囲の人間とのコミュニケーションのイデオムとして考察する視座もでてきている。憑依霊、憑依される者、そしてお告げを聞く第三者の関係を、憑依霊(の語る言葉)をメッセージ、憑依される者を発信者、ととらえることもできる。多くの民族例で見られるように、憑依霊はつねに語るべき言葉を持ち、憑依される者の身体をかりてメッセージを伝えようとする。この行為自体は、コミュニケーションの一種といえるだろう。ただしコミュニケーション論の観点からみて、憑依現象の特徴をあげるならば、それは憑依霊と憑依者、そして第三者の間に決定的なディスコミュニケーションが発生する点があげられる。憑依霊が被憑依者にはいつているとき、被憑依者の自我は現れず、表面に現れているのは、憑依霊の自我になる。多くの場合、憑依され

る者は憑依の時の語りや行動を記憶していない。また、憑依をみているオーディエンスは、憑依霊の語りを聴くことはできても、憑依霊そのものと直接的に交流しているのではないのである。このような三者間のディスコミュニケーションは、憑依現象の不可欠のメカニズムの一部であると指摘できるだろう。憑依という制度は、本質的にブラックボックスを内包していることになる。

たとえば真島一郎は、憑依現象が通常第三者の前でしかおこらないことを指摘して、憑依は個人と霊の関わりを説くイデオロムであるとともに、オーディエンスの存在を必要とするひとつのパフォーマンスであることを論じた[真島 1997:113]。さらに真島は情報論を加味し、憑依パフォーマンスが、不可視の他者そのものについては「見えない」という制限をもちながらも、他者の存在をめぐる情報については、それを身体行為として積極的に「見せる」伝達行為とし、「見せながら隠す」情報操作のパフォーマンスであると主張した[lbid :38]。そして憑依現象を、「見えない憑霊と、見えるパフォーマンスとの拮抗のはざままで、観衆のみならず演者にも際限のない解釈の運動を誘発する」[lbid :138]ことで成立する「舞台」としている。この議論は、多くの憑依現象の事例に対して、広く敷衍できる重要な指摘であろう。

本稿も真島の問題意識を共有しつつ、憑依される者とその周囲の人々の関係とそのコミュニケーション・プロセスに着目する。その際、憑依される者と周囲の人間の相互作用によって、どのように憑依の語りに対する解釈が形成され、共有されていくのかを問題として設定したい。

方法としては、医療人類学で使用される「説明モデル」の概念を用いて分析する。医療人類学においては、治療プロセスに参加する人々-患者、治療者、家族-は、病気の定義と方法について、それぞれ独自の見解もしくは「説明モデル」をもっているとされる[クラインマン 1992]。クラインマンによれば、治療者は患者に治療者の説明モデルを与え、患者は治療者の説明モデルを受け入れようとして、それを理解できるコンテキストの中に置こうとするという。このような説明モデルの解釈運動は、本事例において二転三転する災因の説明様式を整理する上で有効だと考える。そこで本章では、この説明モデルの概念を導入し、災厄の最中にあるバリの人々が憑依の語りを用いて、どのように説明モデルを調整していくか、そのコンテキストを明らかにする。

## 2. 憑依の状況

以下に示す事例は、ワティ、ジェロスリの順に構成されている。本節は、本人のイン

タビユーと筆者の観察を中心に周囲の人々の語りも含み込むようなかたちで再構成している。

## 2-1. ワティの憑依とその状況

黒呪術の存在を明らかにし、トゥヌンの神上がり儀礼のすすめに裏打ちする発言をしたワティの憑依について述べる。

憑依が始まる前の状況は、いつも通りに家の仕事(家事手伝い)をし、恋人とデートしていたという。彼女がいうには、「その日は少し情緒不安定」で恋人と喧嘩をしてしまった。ワティが一方的に怒るのみで、彼はとくになにも反抗せず、ワティをなだめていた。その日は、とくに変わったところのない普段通りの日だったとワティは考えていた。だが、ワティの母ルミによると、ワティは、1年以上前から腹痛や頭痛を訴えており、情緒が不安定で、ルミに対しても些細なことで怒りだしたり、また恋人と会うたびに口論をしていた。そのような変化がみられたのは、恋人と交際が始まった頃からだ、とルミは指摘いた。ワティ自身も、恋人とつき合いだしてから第8夫人ニラが2人の行動を監視するようになったと感じ、この頃からワティはニラに対してよい感情をもっていなかった。ワティの話では、ニラが「黒呪術師ではないか」という噂は知っていたが、義理の母でもあるしそれほど気にすることはなく、ニラとの関係は恋人と交際するまではとくに問題のない関係だったと考えていた。しかし、2002年12月のある日、屋敷寺で些細なことをきっかけにニラと口論してから、2人はしゃべることはなくなった。ワティはこの出来事が契機となって、悪霊が憑依するようになったと考えている。

ワティの話によると、霊が憑依しているときは幻聴があり、その聞こえる内容も自分がしゃべったこともほとんど覚えていないという。周りの人間からは「まるで狂人だった」といわれたそうである。筆者も何度かその現場に居合わせたか、突然怒りだしたり泣いたり感情の起伏が激しく、尋常ではない様子だったが、暴れたり暴力を振るうということとはなかった。憑依の終わったあとは放心したようになっていた。

ワティは憑依を経験してから、呪術医である兄サルの家で暮らすことになった。サルの家は彼の呪術によって浄化されているため、ワティを悪霊から護ることができ、ワティに治療を施す上の問題もあった。しかし、ワティはサルの家でも頻繁に憑依がおこった。ワティには悪霊と祖霊の2種類の霊が憑依するとされており、さまざまなことを語った。ここで家族にとって問題になったのは、発言がとりとめもないが多かったため、話をする憑霊が、祖霊か悪霊かの区別がつかないことだった。悪霊が祖霊のふりをして語ることもあるのだという。ワティの語りをいずれかに判別し、解釈をおこな

ったのが兄のサルであった。彼はワティの語りのみならず、トゥヌンの語りについても解釈をくわえ、災厄の説明モデルを積極的の構築していった。

この指針をつくる過程において、サルは家族内での権威が上昇し、長老クチョスにかわって家長の役割を担うようになり、家族集団の実質的リーダーとなった。また実母ルミも、この「黒呪術事件」において、占い師のもとに通ったり、サルに相談したりするなど、積極的に問題解決に関与し、その結果、相対的に家族内での地位が上昇した。そして、ワティも憑依を経験したことで、家族の中で特殊な地位につくことになる。というのは、彼女の病気が完治したあとも、しばしば祖霊による憑依がおこるようになり、家族に対して助言や忠告をおこなうようになったからである。ワティは、自分に祖霊がいまだに憑依する理由は、自分の心が清いため祖霊に気に入られているのだと考えていた。

## 2-2. ジェロスリの憑依とその状況

ジェロスリは第1夫人次男の長女で、一児の母である。彼女自身の印象を述べると、憑依を経験する前までは、取り立てて目立つ存在ではなかった。ジェロスリも黒呪術の被害者とされる人物で、2002年12月頃からよく偏頭痛と「ストレスを受けたような」胸の痛みがあった。とくに日常生活に支障をきたすことはなかったが、よく近くP村の呪術医サランのところに何度か治療を受けにいった。その診療により胸の痛みはなくなったが、頭痛はずっと続いた。そこで兄から自己治療に関する本『クンダリーニ教本 (Ajaran Kundalini)』を借り、ヨガの瞑想による自己治療を試みた。この効果により、彼女の身体は快復し、精神的にも平安になったという。

4月16日の夕刻にジェロスリは、はじめて憑依を経験する。父サルの家で突然悲しくもないのに泣き出してしまった。その時のことは覚えていないが、泣き出した彼女を気遣う母に向かってジェロスリは「私はおまえの子供ではない！」といい、母も「じゃあ、あなたを誰が生んだのよ！じゃあ、あなたは誰？」と問うたところ、「私の名はバタラ・グデ・アグラ・サクティ・ウィバワ (Bhatara Gede Agurah Sakti Wibawa) (ジェロスリの説明によると、この家族の祖霊神だという)と語ったのである。そして「屋敷寺に私のための場所をしつらえる」といい、周囲にいた人間にこまごまとした忠告を与えた。翌日の夕刻も父の家で再び泣き出し、神懸かりする。両親に対して命令口調でしゃべっていたのだという。その時のことを彼女は覚えていない。憑依がおこると、首は横に、肩は縦にカクカクと小刻みに震え出し、背筋が寒く感じるのだという。そして目をつぶると神が入ってくる<sup>1</sup>。それから、重要な局面で神は力を貸してくれるようになった。彼

女はこののち、祖霊神の力を借りて家族に治療をおこなうようになる。

4月20日のことであった。仕事が終わったあと、従兄レイモンド(第1夫人長男の長男)の嫁が働いているコテージに顔を出した。すると彼女はちょうど家からの電話で従兄チョエ(第1夫人長男の次男)夫妻が激しい喧嘩をしていると聞いたところだった。それを聞いたジェロスは、喧嘩がどんな様子か知りたくて、従兄の家に向かった。その時は、自分が治療行為ができるとは思っていなかった。そして叔母と一緒に様子を見に行くことにした。

仕事が終わってすぐだったため疲れていたが、家に向かっているうちに何かを感じ、力がみなぎってきた。祖霊神が男神であるため、「気分が男のようになってくる」のだという。そしてチョエがいる家に行く前に、祖霊神が線香と水を持っていくようにと彼女の心に囁いた。ジェロスはその神と心の中で会話することが可能であり、半覚醒の状態になっている。祖霊神は、家族に問題が発生したときに、どうやればいいのか、またどうやって薬などをつくれればいいのかを教えてくれたのだという。

ジェロスは人変わりしたような厳しい態度で臨み、チョエの妻にマントラを唱えた水を与え、チョエの鼻先に線香の煙をあてながらを厳しく諭した。そしてジェロスは、チョエが第8夫人ニラの黒呪術にとらわれ、その影響によって彼が妻に暴力をふるったことを看破したのである。彼女は、落ち着いたチョエに対し、神上がり儀礼がおこなわれなかったために祖霊が零落した状態におかれ、黒呪術の攻撃から家族を守護できないという状況をあらためて語った。チョエは祖霊に激しく同情し、神上がり儀礼の必要性を痛感した。

20日から22日の三日間、祖霊神の命によってジェロスは家族を浄めた。治療は、2ヶ月ほど前にデウィ・ガヤトリ(Dewi Gayatri)のためにつくった神棚の前で行うことになった。彼女が祖霊神から治療の事前に指示を受けていたため、憑依せず、自覚のあるままおこなった。だが、彼女はこのような治療行為は普段ならできず、祖霊神の命があり、力をかしてくれたときだけ、それが可能になるのだと考えている。その治療方法は、右手を患者の頭頂部の寸前で触れるか触れないかのところでかざし、左手を臍のあたりで親指と人差し指で輪を作る形にしてとどめておく(ただし、この方法は前述した『クンダリーニ教本』の方法を応用したものであると、ジェロスは語っていた)。彼女は自分の治療の効果は「呪いの元を体の外に引っ張り出すのだ」と考えている。彼女にその実感はないのだが、彼女の治療を受けた人々の感想からその効果を知ったという。治療を受けた人の多くも「気分が良くなる」という発言が目立った。治療をするときは、祖霊神が力を貸してくれているのだという。

ジェロスリはこのようなヒーリングの力を得たと同時に、祖霊神から多くの制約を受けるようになった。その制約の内容は、眠る場所や食事、祈りの方法、死人を避けることなどで、祖霊神はつねに精神と体を清く保つことを要求した。また祖霊神はジェロスリに「ジェロスリマス(Jerosulimas)」という新しい名前を与え、5歳になる娘にも「ジェロスダアン(Jerosudaan)」という名前を与えた<sup>2</sup>。祖霊神は、この娘もまた、将来彼女のように祖霊神と通じ合える存在になると予言したのである。

筆者がジェロスリに「なぜ自分が家族の中でただ一人祖霊神に選ばれたのか」と問うと、「私の心が一番清かったからだと思う」と答えた。そして「一族の男たちは女遊びが好きだし、博打が好きだから」という批評をくわえた。また、ジェロスリはワティの憑依と自分の憑依を区別し、ワティの憑依は悪霊や祖霊など入り乱れているが、自分には「祖霊神と祖霊」のみが憑依するとしている。さらに、ワティに憑依する祖霊はまだ神上がりしていないものであると考えており、ワティに憑依する祖霊よりも自分の憑依霊のほうが格が上と感じているようであった。彼女はまた祖霊神と祖霊の能力の相違について、祖霊神が憑く場合は助言と治療行為ができるが、祖霊が憑く場合は重要な場面で助言や忠告をしてくれるとしている。ワティとジェロスリの一番大きな違いは、ワティの憑依が泣いたり怒ったりと感情の起伏が激しく発言も混濁しているのに対して、ジェロスリの場合は態度こそ豹変するが、発言が明瞭で、はっきりと「祖霊神の意志」を語るができるという点である。彼女は憑依を経験した最初の頃は憑依時の記憶がなかったというが、時が経つにつれ、ある程度憑依時の記憶を保持できるようになり(彼女によれば憑依中は半覚醒のような状態で、記憶が曖昧なときもままあるという)、憑依中における身体も統御がいくらか可能になった。彼女はワティよりおよそ2ヶ月ほど遅れて憑依を経験し、発言の内容もトゥヌンやワティ、あるいは父サルムの解釈を後追いするようになっていた。だが、彼女の明快な憑依の語り、それらの語りを強烈に裏打ちにしたことは想像に難くないだろう。

このように憑依現象を統御できるようになったジェロスリだが、彼女自身はトゥヌンや呪術医と異なる存在だと考えている。彼女のいう違いとは、トゥヌンはどんなときでも、直接神とコンタクトを取ることができるが、彼女は家族の治療や浄めのときにしか祖霊神は降りてこない。あるいは、呪術医のように万人に対して治療はできず、家族に限定されているという点である。彼女は祖霊神との約束により、家族の治療のみを許されているといい、それをおこなう場合でも必ず祖霊神に伺いをたてるのだという。ただ呪術医の仕事については、父サルムが呪術医だったこともあり、以前から呪術に対して興味をもっていた。彼女は、サルムが持っている呪術の本を2年くらい前から借りて

読んでおり、「呪術関係の本を読むのが趣味だった」<sup>3</sup>。

憑依能力を獲得したことにより、ワティ同様、ジェロスリは家族内での地位は変化した。家族儀礼などの際、家族の皆に聖水を配る重要な役目などを担うようになり、現在の実質的家長サルの助手役を務め、儀礼を2人でとり仕切るようになった。憑依を経験する以前は、彼女はとても内気で人前にでるような性格ではなかったという。しかし、「神に近い人間になった」ことを自覚した現在は、儀礼の時は家族の前面で率先して儀礼をおこなうようになった。

「黒呪術事件」の張本人とされる第8夫人ニラについては、以前から「ニラが黒呪術師」という噂を聞いており、ジェロスリ自身もそれを信じ、ニラを「穢れた人間」と考えていた。結婚後、ニラに追いかける夢を見た覚えがあり、彼女の長兄もまたその類の夢を見たという話も聞いている。こうしたことがあって、この「事件」以前からニラとの積極的な交流はなかったという。

### 2-3. 憑依による新しい関係性の構築

本項では、憑依がワティとジェロスリにとって何をもたらしたのかをみていこう<sup>4</sup>。

この2人が経験した憑依現象の共通性は、(1)憑依経験以前の心身の不調、(2)祖霊憑依の正当的理由づけ、(3)「黒呪術師」と目される第8夫人ニラとの確執の存在、(4)家族内における特殊な地位の獲得にある。

憑依以前の心身の不調についていえば、たとえば、トゥヌンにしてもこの道に入る以前に重病に陥り、生死の境を彷徨った経験をして、憑依現象が起こるようになったという。バリでは、憑依型の占い師や呪術医の多くがもともと心身に問題を抱え、重篤な病や事故を契機に神との交流が始まるケースが一般的である[Belo 1960; Lovric 1986; Suryani and Jensen 1993]。また、憑依を経験するものの比率は女性が圧倒的とされており[吉田 1983]、その多くは職業的巫師を目指して憑依を統御するための修行をおこなう[Lovric 1986]。サルの話によると、祖霊が憑依する女性というのは「どの家族にも1人か2人は存在」し、家族の中における彼女たちの存在はとくに奇異には映らないのである。

ベロはバリの憑依を4通りの形態に分類している。一定の憑依経験者集団が儀礼のある段階でトランスに陥り、おのおのが特定の神の言葉をもたらす。パロン-ランダ劇の途中にトランスに入るものがあり、多数のオーディエンスがトランスに陥る中、ほぼ決まった人物が神の言葉をもたらす。サン・ヒャン・ダンスを踊る女性ないしは少女がトランスに入って踊る。憑依経験者が特定の動物やものに憑依され、その



様態を模して辺りを徘徊する。さらにベロはこれらのさまざまなトランス形態から、a.トランス形態の多様性、b.憑依経験者に神や悪霊が入り込むという観念、c.神と人間のコミュニケーション、d.意識的なトランス行為の存在、といった特徴を指摘している[Belo 1960: 251-255]。ワティとジェロスリに関していえば、 から のような儀礼や舞踊劇とは無関係で、a から d の分類でいうと、ワティは b と c、ジェロスリは c と d にカテゴライズされるだろう。とするなら、ワティとジェロスリの憑依は、ある程度バリの憑依の形式に則っているといえるだろう。

(2)の祖霊憑依の正統的理由づけの項においては、2人とも清く正しい人間であるゆえに、「神に好まれた」という優越的意識をもっていた。はたしてその自信ゆえか、時が経るにつれて、彼女たちの憑依現象は安定していった。ワティは黒呪術による悪霊の憑依がなくなった後、しばしば祖霊の憑依にとらわれたが、以前のように錯乱することはなく、多少感情が高ぶるにせよ、語りが明確になっていった。すでに述べたように、ジェロスリは祖霊神から多くの制約を受けることになったが、憑依時の身体統御も可能になった。つまり、憑依霊の性格も数度の憑依を通じて安定した個性を獲得し、彼女たちも憑依される者としての新たな個性を獲得するようになったのである<sup>5</sup>。このような神からの制約や憑依時の身体統御の熟達などは、たとえばトゥヌンにしる、吉田の報告にあるサドゥグにしる[1983]、専門的な巫師に重なるところが大きく、このあたりからも、ジェロスリの憑依にはバリのオーソドックスな憑依観が反映されているように思われる。

次に(3)の第8夫人ニラとの確執であるが、これは単純にワティおよびジェロスリとニラの関係性の問題にとどまるものではない。ワティの母ルミとジェロスリの父サルは、ニラが長老クチョスの結婚当初から、ニラと不仲であった。「黒呪術」という要素を抜きにしても、クチョスと幾人かの妻との不平等な関係性や家族における共有財産の分配という現実的な問題において、彼らはずねにニラを槍玉に挙げてきたという経緯があったのである。それゆえ親の態度や言葉の影響が娘たちに及んでもおかしくはないだろう。このようにニラと不仲だったサルとルミは「黒呪術事件」以来、娘たちの憑依の語りに関与することで、前述したように積極的にその地位を上昇させてきたのである。

さらにもっとも注目すべき点は、(4)ワティとジェロスリが家族の中で特殊な地位に収まったことであろう。繰り返しをおそれずいえば、2人は憑依を経験する以前、おとなしく目立たない存在だった。この評価は本人たちのものだけではなく、周りの家族の評価でもあった。しかし、憑依という能力を得ることにより、その地位は大きく上昇した。

ルイスは憑依現象において「周縁カルト」なるものを示し、それを社会的弱者が不平等な社会関係を表明し改変するための抵抗運動とした[ルイス 1985]。いうなれば、憑依には、不満足な現状を操作しようとする弱者の戦術的側面が窺えるのである。本事例をみると、憑依の語りが集団における地位の均衡に劇的な変化を与えたことは間違いないだろう。彼女たちによる憑依の語りは、旧来の関係性からの転換の契機となった。憑依の語りは、こうして家族集団における新たな関係性と共同性を構築し、また何人かの成員に対して新たな意味づけを与えるという、改変を促す語りとなったのである。

### 3. 考察・説明モデルの再構成と憑依をめぐるコンテキスト

では、憑依の語りを成立させるコンテキストとはどのようなものだろうか。

クラインマンの説明モデルを災厄に適用できるように修正するならば、その構成は、災因、災厄のはじまりとその様態、その内容と経過、対処方法となる。憑依現象が家族集団に出現する以前の状況では、人によってそれぞれの項の内容は多様性に富み、個別的だった。ところが と を別にすると、ワティの憑依が起点となつてから、家族に共通の 災因と 対処法が定まるようになった。災因は、「第8夫人の黒呪術」であり、究極的には「神上がり儀礼の未遂行」とされたのである。そして災因を除去する最良の方策は、神上がり儀礼の遂行とされたのだった。

その過程で、本来は別のコンテキストで語られるはずの「黒呪術」と「祖霊祭祀」の問題が、「トゥヌンのお告げ」「憑依による発言」などによって、その時点における妥当な解釈と結びつけられ、結果として家族の関心が次々に移行したのである。憑依による語りが、その時々における混乱を修復させるための指針を与えているのは間違いない。人々もまた、憑依による語りを信頼し、いわば、行動の指標としてその言葉に従っていた。はたしてこのことは何を意味しているのか。ここでは憑依の語りの内容に焦点を絞って、黒呪術の脅威を打ち消す効果を持つ祖霊祭祀の物語に関する背景を明らかにしなければならない。

吉田はカランガスム県のトゥヌンと同種の憑霊型占い師サドゥグに相談したクライアントの事例を5つ報告している。それによれば、災厄の内容は、家族の病や人間関係の不和、経済問題など多岐にわたっているが、原因のほとんどは、黒呪術と祖霊祭祀の不足の組み合わせか、あるいは祖霊祭祀の問題のみの2種類に大別できる[吉田 1980:142-144]。稀に、災厄の原因を黒呪術ないし自然現象のみとする場合

もあるが、サドゥグやトゥヌンの語りの内容は、管見する限り、祖霊祭祀に帰結する傾向が強い。

また、クチョスの家族の重要な関心事となった起源集団探しの問題も、バリにおいては、家族集団のアイデンティティを支える重要な根拠として考えられている。永淵によれば、新たに起源集団を探し、それに帰属するようになった人々の経緯を調べると、彼らはその帰属要因を病気などの身体の不調をはじめとする災厄から説明するという。バリの人々は身内の人間が不慮の死を遂げたり、重い病気に見舞われたとき、起源とする先祖が誤っているという可能性を考える。その場合、占い師のもとに赴いて「正しい起源」を探し出すように計らってもらうのが一般的なのである[Belo 1960: 239-243]。起源の探求は祖霊に関わっており、それゆえことは身体に変調をきたした人間だけの問題にとどまらず、父系親族全体の問題になるからである[永淵 1994: 19]。

とするならば、憑依が産みだす語りのテキストは、バリの文化が提供する資源から、その要素が選び出され、構成されると考えられる。憑依現象から提供されたテキストは、周囲の人々に原因不明の災厄への理解可能な思考の枠組みを与える役割をもつことになるのである。そうしてはじめて「被害者」たちは、可視的世界に起こった災厄について、自分なりの説明モデルを構築することが可能となるのである。本事例における個別的説明モデルから集団的説明モデルへの移行とは、憑依の語りによって「被害者」の現実的な出来事を文化的に再構成したことを意味するのではないだろうか<sup>6</sup>。いいかえれば、人々がいかに自分たちの想像力によって構成した現実世界を生きるのかという問題にも繋がるのである。

#### 4. おわりに

本章では、災厄時におけるコミュニケーションプロセスにおいて、憑依の語りがいかなる文化的位置にあり、どのような社会的コンテクストによって成立しているのかを考察してきた。本稿では、憑依の語りによって発動する社会的実践の数々を具体的に提示できたと考えている。

最終章では、なぜ黒呪術と祖霊祭祀が接続されるのかをみていこう。

---

<sup>1</sup> 憑依の身体技法に関する詳細は、たとえばベイトソンとミード[2001]参照。

---

<sup>2</sup>「ジェロ(jero)」とは、バリ語で「高貴な、内側の」という意味の語である。

<sup>3</sup>ここで非常に興味深いのは、彼女は治療行為は宗教的实践とは考えていないことである。彼女の考えでは、宗教实践とは「神に対して祈りを捧げたり、儀礼を行う」ことであるという。治療行為に関しては「神の力は借りているが、単なる人助けだ」と考えている。

<sup>4</sup>トゥヌンの憑依の語りについての考察は第4章の考察をもって参照されたい。

<sup>5</sup>古谷はこのような過程を「個性化としての憑依」とよんでいる[古谷 1992]。

<sup>6</sup>だが当然、憑依の語りが変化すれば、人々の解釈も流動的になることも留意しなければならない。また、憑依の語りが一方的に人々に解釈を押しつけるものでもない。この解釈運動は、憑依の語りと周囲の人々の相互作用によって形成されるということを目指しておきたい。